

# 図書館だより

## 文化学園図書館

文化女子大学・文化ファッション大学院大学  
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.151

2011年1月20日発行  
東京都渋谷区代々木3~22~1  
TEL.03-3299-2395  
FAX.03-3299-2604

### 母との別れ「願わくは花の下にて……」

文化女子大学教授(家具・インテリアデザイン担当) 木村 戦太郎

「そろそろ母の介護を交代して」と姉から言われたのが2002年の夏、当時母は93歳、私は筑波の短期大学に単身赴任して4年目でした。

介護については家族で相談したうえで姉が引き受けましたが、年々負担が大きくなり、自宅で自営業をしながら行う介護が限界にきたのです。介護保険法が施行され、特別養護老人ホームがたくさんできていたので、平日は筑波、土日は東京や神奈川周辺を調べ回りましたがどこも大勢が順番を待っており、評判の良い施設は絶望的な状況でした。

結局、家内が見つけてくれた東京・大森の介護付き老人ホームに入居したのが1年後の夏です。しかしこのホームは入居後約1年で突然閉鎖します。入居者には好評だったヘルパーの人間的な対応や介護方式が違法と判定され、巨額の交付金返還を請求されたからです。慌ただしく川崎市溝口近くのホームに移りましたが、そこは極めて合理的に運営されるホームでした。施設は新築で中庭があり、料理はそれなりにおいしく、衛生面は万全ですが対応はクールでした。当初は人間味に欠けると感じましたが、母の認知症が進行し体調も悪化するにつれ、その適切で安定した対応に信頼感を持ち始めました。

私が母を見守ったのは約2年半でしたが、久しぶりに母と正面から向き合えて親子の対話ができ、あ

らためて母とのつながりを感じた日々でした。大森の施設は個室だったのでベッドを2つ置き、最初の夜はそこに泊まりました。母と並んで寝るのは幼児期以来で、不思議な気分でした。その後は夕方に訪れて一緒に食堂で食事をして部屋に戻り、初めて聞く私の幼児期のエピソードや、母の少女時代、戦死した父の話までいろいろ聞かされました。

入居して驚いたのが、“しも”の粗相が大変だった母が失敗しなかったこと。母も「皆さんが優しくしてくれる」と満足そうでした。絶えず優しく声を掛けられる、ゲームやお絵描きで頑張れば褒めてくれる、これが母に活力を与えてくれたようでした。しかし、ついつい嬉しくなって頑張りすぎてしまい、疲れから体調を悪化させて入院する、これを繰り返しながら次第に弱っていきました。まったく高齢者介護は難問だらけです。同居を望まれても家族は応えられず、負担の限界もあります。また、現状の一方的な介護に老人が誇りを持てるのが、この点も疑問です。施設で作業をさせ報酬を払うことは禁止のようですが、役割を感じながら前向きに生活でき、期待されることで意欲もわく、そんな介護があっても良いはずだと思ったものでした。

母の命日は誕生日の“花祭り”まであとわずか、大好きな桜の花が咲いていた2006年の春でした。

## 佐藤さとる作『だれも知らない小さな国』

文化服装学院講師(外国語担当) 薩田 須美子

読書の楽しさを私に教えてくれた本が佐藤さとる著『だれも知らない小さな国 コロボックル物語』です。小学2年生か3年生の夏休みも後半に入ったある日、父が図書館から借りてきた本の一冊です。その当時の私にとっては小さな字で埋まったハードカバーのその本はとてつもなく厚く、大人が読むような一冊に見えました。それまで絵本でお話の世界を楽しんでいたのですが、この本は私にとってのまさしく小説の第一冊目となりました。初めてどっしりと重量感のある本を手にした時の期待と、200ページ以上もある本をはたして読み終えることができるのだろうかという不安とが入り交じった気持ちで読み始めました。

少年がコロボックルと呼ばれる小人たちの信頼を得て、成長した後彼らの世界を守る手助けをするお話です。読み始めるとその面白さに引き込まれ、時を忘れて夜遅くなるまで読みふけていたと記憶しています。主人公の青年が、雨の降る夜コロボックルと話をする場面にさしかかった時、まさしく東京も雨の降る夜でした。雨音を聞きながらページを繰るその時の高揚感を今でも思い出します。自分の身の回りにもコロボックルが現れるのではないかというワクワク感とともに残りの夏休みの日々を過ごしました。

この夏の経験が読書の醍醐味を教えてくれました。自分の想像力を駆使することで日常から脱却し、非日常の世界、ファンタジーの世界を満喫するのが読書の楽しさの一つでしょう。その夏に覚えた達成感と読書の楽しみは本のタイトルとともに記憶に深く刻まれました。

その後、年を経るにしたがって読む本も変わっ

てきてはいますが、自由な時間がある時には長編を楽しむようになりました。中学時代は翻訳本ばかり読んでいました。外国の家にある屋根裏部屋や天窓のイメージがわかず、どんな建物なのだろう…、アップルシュトゥルデルとは、注にリンゴで作った焼き菓子と書いてあるけどどんなお菓子なのだろう…、日本の外への好奇心がむくむくとわいてきたのもこの頃だったように思います。

大人になって本屋さんの店先で文庫の一冊として陳列されているこの本を見つけ、即購入しました。懐かしい友人と再会したようでした。今回この文を書くにあたり、また読み返してみました。子供の頃には読み取れなかった弱者でも力を合わせ知力で防衛しようとする努力の必要性・教育の大切さへの作者の思いに気付く、あらためて読書の奥深さを知らされました。

本を手にした時に始まる期待感、そして表紙を開き一頁ずつめくり読み進むにしたがって、左手から少しずつ右手に頁数の厚さが移ってく変化を感じます。話の展開を体で感じるといったら過言でしょうか。今、iPadをはじめとする各種電子端末器で読める電子ブックがいきわたるようになってきました。書物の形態は手書きから印刷された書籍といったように、世につれ変化してきました。情報、知識を獲得するための読書と空想の世界を楽しむ読書ではその手段が異なって当然だと思えます。そう考えるとしばらくは電子ブックの普及とともに、書籍が共存していくものと思えます。楽しい本の世界がさらに広がることを期待しています。

\*講談社刊『だれも知らない小さな国』〈文庫S〉

ルネマリー・カザール著

## 『雨傘、日傘、ステッキについてのエッセイ』

René-Marie Cazal : Essai historique, anecdotique sur le parapluie, l'ombrelle et la canne et sur leur fabrication  
Paris : Typographie Lacrampe et compagnie, 1844. (KEO1/383.4/C)

文化女子大学准教授(ファッション文化論担当) 北方 晴子

本書は、1844年にパリで発刊されたアンブレラ、パラソル、ステッキについてのエッセイ集である。歴史や逸話、素材、製法について書かれたもので、本のサイズは、縦18cm、横12cm、全104ページからなる小型の冊子である。

19世紀は、現代とは比べものにならないほど、身だしなみや服装の規範が厳しかった時代である。当時、装いに関しては、時間や場所に応じた厳しい決まりがあり、それは次第に複雑で多岐にわたるようになる。特に1840～70年代にかけて、その処世術を記した手引書は数多く出版された。それらは、当時の人たちの行動を示してくれる資料として、大変貴重なものである。機会があったら、ぜひご覧いただきたい。

本書の中で著者は、傘やステッキについて、古代ギリシア、ローマ時代から中国、日本も含む歴史について触れている。そして、素材や製造方法にまで記述はわたっている。

そもそも、ステッキの歴史は大変古く、古代社会では高貴な身分の人たちに持たれていた。古代エジプトにおいては、持ち手に装飾が施されたステッキが発掘されている。ギリシア神話の中でも杖を持った神が描かれている。そして中世に入ると、聖職者が携え、身分や権力を象徴した。その後、主にステッキは男性用として、16世紀に登場する。服飾史の文献に登場するのもその頃である。

アクセサリーとして流行するのは、17世紀である。剣が左の腰に吊り下げられていたためであろうか、ステッキは通常右手で持たれ、そうすることで当時の完璧な紳士像が完成した。<sup>1)</sup> 房飾りをあしらった当時主流のステッキは、おおよそ長さは2

フィートから3フィート(約61cmから91cm)で製作された。

ルイ14世の時代には、男性モードにおいての不可欠な装飾品となっていく。ルイ14世(Louis XIV、1638-1715)は、ステッキを持たずに公の場には現れなかったといわれている。彼はとりわけ高価に装飾されたステッキを好んだ。象牙や黒檀を使い、持ち手には、琥珀、ルビー、トルコ石、ダイヤモンドがあしらわれた。

同じ頃のイギリスでも、先端に金や象牙のついたものが持たれた。イギリス国王チャールズ1世(Charles I、1600-1649)は多くの肖像画の中で、ステッキを携えている。

日々の出来事を詳細に綴った『サミュエル・ピープスの日記』の中にも登場する。

「ステッキ屋に入り、散歩用のステッキを一本買った。値段は、4シリング6ペンス(当時、日給がおおよそ1シリング)」(1664年4月)

「ニス塗りのステッキを進呈してくれた。大変立派なもので、持ち歩くにも軽い」(1667年7月)<sup>2)</sup>

18世紀になると、ステッキは男性にとってもますます重要な装飾品になっていく。帯剣の禁止令が、ステッキの普及に拍車をかけることとなる。劇作家で服装史家のメルシエ(Mercier, Louis-Sébastien、1740-1814)は、「ステッキが剣の代わりに用いられるようになったので、人々は細身のステッキを手にも急ぐ。おかげで歩みは軽快になり、それ以上にほんの少し前まではあれほど日常茶飯事であった剣による流血事件はもはやない。法律というより、風俗がこの変化をもたらした」<sup>3)</sup>と述べる。

このように、ステッキは剣の代用品として用いられるようになった。フランスでは18世紀末期、男性がステッキにお金を費やしたために、特に独創的なデザインのものに対しては、課税がされた。また、18世紀には、伝染病を防ぐという理由から、殺菌剤が持ち手の先端に入れられたステッキを医師が持ち歩いた。そして、悪臭がひどかった当時の街では、防臭のために香りの玉を入れた金属製の小さな穴のあいたステッキも登場し、疫病よけとしても持ち歩かれた。

他方、女性のアクセサリとしてもステッキは登場する。記録の上では11世紀に登場するが、いったん姿を消し、再び登場するのは18世紀末期である。女性がステッキを携えた姿は、当時のコスチュームプレートの中にも、たびたび登場する。女性用のステッキの持ち手の部分には、化粧用の鏡や香水瓶、中にはオルゴールが隠されているものもあった。この時代、女性の靴のかかどが高くなり、歩行を支えるためにステッキが必要とされた。当時、医者が女性に運動のひとつとして、散歩を奨励したということもあり、女性にとっては装身具というよりも実用性が高かった。

19世紀はステッキが最も流行し、多様化した。ファッションプレートを見ても、“ダンディ”と呼ばれる男性たちが小粋にステッキを手にしてしている姿が目にとまる。シルクハット、フロックコート、手袋、ス

テッキという姿は、19世紀の男性の典型的なスタイルであった。当時、紳士にとってはステッキを持たずに外出することは無作法であるとも考えられ、その持ち方も重要であった。作家バルザック (Balzac, Honoré de, 1799–1850) は「ステッキの握り方ひとつでその人の精神がわかる」<sup>4)</sup>と述べる。

1894年のフランスの新聞では22種類ものステッキの種類を紹介している。<sup>5)</sup> 持ち手にペンやタバコ、双眼鏡、ナイフやフォークなどを備えたものや、ステッキそのものが椅子になるものやキャンバスのイーゼル(掛け台)になるものなど多種多様である。そのため、ステッキの製造業者は様々な種類のステッキを創案しなければならず、そうした評判を聞きつけた製造職人がパリでその製法について学んだ。

ステッキは、20世紀、特に1930年代には衰退し始めた。1930年代は男性モードが簡略化の傾向へと変化した時期で、その影響を免れなかったのだろう。

- 1) フランソワ・プーシェ著『西洋服装史』文化出版局 1973
- 2) R. C. Latham & W. Matthews (ed.) 『The Diary of Samuel Pepys』 London, HarperCollins, 1995
- 3) L. S. Mercier 『Tableau de Paris』 Paris, Mercure de France, 1994
- 4) オノレ・ド・バルザック著 山田登世子訳『風俗のパトロジー』新評論 1982
- 5) Max von Boehn 『Ornaments』 N.Y. Benjamin Blom, 1929



17世紀の男性の装い(本書より)



19世紀の男性とステッキ(本書より)

## 「もし高校野球の女子マネージャーが ドラッカーの『マネジメント』を読んだら」について

文化女子大学准教授(服装社会学担当) 江戸 克栄

この本を書店で最初に見たときは衝撃的であった。青い空と雲。そして、いわゆる「萌え系」の女子高生のキャラクターのイラストが表紙を飾るこの本のタイトルには、なんと「ドラッカー」と「マネジメント」の文字が見える。経営学関係の書籍を長年見てきたが、あまりの驚きで手に取り、購入したことを今でも覚えている。

通称「もしドラ」。2009年12月に出版されてから、「マネジメント」という用語がタイトルに使われている書籍としては、異例ともいえるベストセラーになり、150万部にまで達している(2010年10月現在)。「日経MJ」のヒット商品番付で取り上げられ、一大旋風を巻き起こしている本であり、2011年3月からのアニメ化や映画化も決定した。

この書籍に関する書評は、ベストセラーとなったためなせ売れたのか等については多く書かれているので、それについては言及しない。また、この本をここで取り上げることが果たしてよいのかわからない。ただ、これだけ社会的にセンセーションを巻き起こした書籍であり、本学学生を含め、経営、マネジメント、マーケティングを専門としていない学生であっても、「知らない」ではすまない。そこで、この本の価値とユニークさについて考えたことを紹介していきたい。

まず、この本の意味である。この本のストーリーは、都立高校野球部の女子高生マネージャーが、偶然にもドラッカーの著作『マネジメント』に出会い、仲間たちとマネジメントの教えを実践しながら、甲子園を目指していく物語である。ドラッカーの『マネジメント』から時折文章を引用しながら、エッセンシャル版よりもさらにエッセンスのみにし、平易に伝えている。特にマネジメントの対象であるヒト、

マーケティングと戦略について多く書かれている。ドラッカーのマネジメントのポイントである「顧客」や「イノベーション」もストーリーの中に入れてあることも評価すべき点であろう。

今まで経営やマネジメントについて考えたことのない、あるいは初心者にとっては非常にありがたい基本的知識が実用的に使われている。読者が、マネジメントについて興味を持って、その必要性を考えてくれればこの本は価値あるものに違いない。

さらに、この本の特筆すべき点はドラッカーに焦点を当てたことである。ピーター・ドラッカーは、経営学やマーケティングを専門にした人ならば知らない人はいない。オーストラリアが生んだ20世紀経営学最高の偉人であり、「マネジメントの父」とも言われている人物である。ニューヨーク大学教授等を歴任し、2005年、95歳で亡くなるまで、数多くの著書と研究を残した。その中でも大著が『マネジメント』であり、全部で61章、日本語翻訳も上中下巻併せて1,100ページにもなる。

それを小説にして『マネジメント』がわかるわけがないと言われる方もいようが、重要なことは、経営学を専門にやっていない人にとって、これが興味の始まりとなることである。「女子高校生が『マネジメント』を読む」こと自体、読者に平易であるという安心感を与えていることがユニークであり、この本の価値なのである。マネジメントの哲人ドラッカーの功績に対して関心を持つ人が増えることは、経営学を中心としていない学部でマーケティングマネジメントを教えている者にとって、この上ない喜びである。

\*岩崎夏海著「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」<336/1>

\*ドラッカーのその他の著作も本学図書館に多数あり